

杉の子

奥多摩町立氷川小学校
学校便り 10月号
令和4年 9月30日発行

協働力・協調性・共感力

主幹教諭 稲葉 義愛

お天気が心配されますが、明日は子どもたちが楽しみにしている運動会です。これまでの練習の成果が存分に発揮される一日となるよう願っています。

私は本校に赴任する前、南米、パラグアイ共和国にある「アスンシオン日本人学校」に勤務していました。現地に駐在する日本人子弟のための学校で、日本の教科書を使い、日本のカリキュラムに沿って授業や学校行事を行います。

日本の学校に準じた教育活動を行うので、もちろん「運動会」も実施されていきました。ただ、小学1年生から中学3年生まで、全校児童生徒を合わせて15名程度のとても小さな学校でしたので、運動会を実施するには規模が小さ過ぎます。そこで毎年、近くのパラグアイの公立学校、アメリカ人学校、ドイツ人学校の子どもたちを招いて、交流も兼ねて一緒に競技に参加してもらっていました。そこでまず驚いたのが子どもたちの体格差です。特にアメリカ人やドイツ人の子どもたちは体格がよく、中学生ともなると生徒なのか先生なのか見分けがつかない子どももたくさんいました。

そんな中、リレーや綱引き、玉入れや大玉送りなど、日本でおなじみの競技を行うのですが、何より印象的だったのは、どの競技でも日本人の子どもたちが圧勝することです。決して体育が得意な子どもたちばかりではなかったのですが、どの競技でもいつの間にか日本人チームが勝ってしまいます。現地の先生たちには、「日本の学校は体育ばかり教えているのではないか」などと冗談交じりに言われました。「今年是对策を立てて練習してきたのに、なぜか勝てない」と言われたこともありました。任期の3年間、日本人の子どもたちの圧勝は続きました。私は毎年同じ光景を目にしながら各国の教育事情の違いを感じました。

日本の学校では体育の授業に限らず、「同じ目的のために力を合わせて働く（協働）」、「同じ目的のために役割を自覚して協力する（協調）」、「他人の考えや感情に寄り添い、察する（共感）」する場面を多く設定しています。それに対して欧米の学校では「個」を重視し、自分の意見や考えを主張することを大切にします。それが運動会競技における差として出たのではないかと考えました。どちらがよい、悪いではなく、これが私たち日本人の「強み」なのだと感じました。バトンリレーの際、走るのが苦手な子の距離を短くする、綱引きでは声をそろえて綱を引く、玉入れでは投げる人、玉を集めてくる人などの役割分担をする、大玉送りでは左右に大玉を支える人を配置するなど、私たちは「周りも自分も生かす」ことを自然に行っています。私たちが当たり前だと思っているこのような動きも、他の国の子どもと比較することで実はそれが「強み」だったのだと分かります。

先週までの全校練習でも、6年生児童を中心にリレーの走順を工夫したり、全校競技で役割分担をしたりする場面が見られました。また、競技だけでなく、整列や行進の場面でも高学年児童が低学年児童に位置を教えたり、誘導したりしていました。

明日の運動会本番、たくさんの種目で協働、協調、共感の場面が見られることと思います。日本人の「強み」を存分に発揮する子どもたちに、温かい励ましをお願いいたします。